

# 社会学を専門としない学科でのフィールドワーク教育の効用

○大阪医科大学 栢澤 健史

鳥取短期大学 渡邊 太

## 1 目的

現在の大学においては、学部を問わずアクティブラーニングや PBL といった教育法を導入することが必須となっている。それにたいして社会学がどのような貢献を果たすことができるのか、報告者の実践に基づいて検討するのが本報告の目的である。とりわけ、社会学が専門分野ではない学部や学科において、現在、大学に求められる教育法にたいする社会学的教育の効用をフィールドワークの導入を事例として明らかにする。

## 2 方法

実践の舞台となるのは、報告者が以前勤務していた近畿圏にある中小規模の文系私立大学である。報告者が担当する科目は社会学系であるが、複数の専門分野から成る学部と学科には社会学分野は存在せず、学生も社会学を学ぶことを目的には入学していない。報告者は学部・学科の各種ポリシーに基づく社会学教育を試行錯誤するなかで、フィールドワークの導入が重要となることに気がつき、4年間を通じてそれぞれの段階に適したフィールドワーク教育を導入した。

## 3 結果

1・2・3年次の基礎的な演習や選択科目のフィールドワーク導入としては、①「通学電車各駅停車の旅」、②「学生生活の相互インタビュー」、③「大学近隣の商店調査」といったテーマでフィールドワークを行った。これにより以下の学習効果が確認された。

- ① 自分自身で現場に足を運びデータを収集しながら問題を発見する研究姿勢を身につけた。
- ② 異なるタイプの学生同士のペアワークを通じて生活様式の多様性への認識が開かれた。
- ③ 下町エリアでの地元密着型商店の調査を通じて街の風景を多層的に見る訓練を積んだ。

3年次の専門セミナーでは、大学と地域協働の提携を結ぶ地元商店街と農村地域でフィールドワークを実施した。いずれも地域活性化を目標として、(a) 地元商店街ではイベントへの参加、(b) 農村では合宿を伴う生活史の聞き取り調査を行い、その成果を報告書にまとめた。ここでは以下の学習効果が示唆された。

- (a) 衰退する商店街という固定観念から離れて、変化しつづける商店街の実情を体験的に学ぶと共に、ゲストプレーヤーとして商店街活性化の一翼を担うことで商店街の活力を実感した。
- (b) 商品作物を扱う農村地域での生活史調査を通じて、一見閉ざされた地域共同体が外部との交通に開かれていることを知り、学生自身の生活との接点も見出せた。

## 4 結論

大学が位置する北河内の下町エリアは学生からすると大規模チェーン店も無いし、京都・奈良・滋賀の境界に位置する農村はコンビニさえ無い。だが、他者のまなざしを経て理解を深めるフィールドワークの技法を導入することで、縁遠く感じられていた事柄が意外と自分の生活と無関係ではないと気付き、地域の魅力を再発見する。教員も含めて調査者がプレーヤーとなる参与観察の手法は学生を未知の世界へ巻き込む力を発揮する。「やらされ感」に陥ることなく、学ぶことがうっかり楽しく思えるデザインであり研究のアソシエーションへの参入を促す。これは社会学に限らずどの文系分野においても学習の鍵となりうるものであり、とくに専門セミナーにおけるフィールドワークの活用は総合的な学習の形式として優れた効用があることがわかった。ただし、現況ではこうした教育プロジェクトを持続・発展することの困難が課題でもある。